

精神分析理論を通して見た「父—娘関係」の理解

三 宅 裕 子

The Issue of the Father-Daughter Relationship in Psychoanalytic Theory

MIYAKE Hiroko

I. は じ め に

男性にとっても女性にとっても、両親あるいは両親イメージが人格形成に及ぼす影響は非常に重大である。ここでは、娘の人格発達にとって父親がどのような役割を果たすのかを、おもに精神分析理論にしたがって概観したい。

II. Freud における「父親」

精神分析の創始者である Freud が、精神療法や自己分析を通じて人間の無意識を探究する中で、神経症の中核としてのエディプス・コンプレックスを発見したことは既によく知られている。つまり「幼児は、男根期に入ると性の区別に目覚め、異性の親に性的な関心を抱くようになる。とくに男の子は、母に対して性欲の萌しを感じ、父を恋敵と見なして父を嫉妬し、父の不在や死を願うようになる。反面彼は父を愛してもいるために、自分の抱いている敵意を苦痛に感じ、またその敵意のせいで父によって処罰されるのではないかという去勢不安を抱くに至る。このような異性の親に対する愛着、同性の親への敵意、罰せられる不安の三点を中心として発展する観念複合体を Freud はエディプス・コンプレックスと命名した（小此木，1985）」のである。そして男根期を過ぎるとエディプス・コンプレックスは消滅し潜伏期が始まるとされているが、その際、父親または両親の権威が自我の中に取り入れられて超自我が形成される。つまり、近親相姦の欲望の充足を禁止されて諦めたときに「両親にたいする備給を両親への同一化に変え、禁止を内在化する（Laplanche, J. et Pontalis, J.-B., 1967）」のである。Freud における「父親」は、エディプス・コンプレックス、去勢の威嚇、超自我の形成という文脈の中で第一に重要な位置を占めている。しかしこの点に関して男児と女児の間には違いがあるとされており、以下、女児のエディプス・コンプレックスはどのように理解されているのかをより詳しく見て行き、そこから女児の精神発達において父親はどのような役割を果たすのかを考察したい。

Ⅲ. 「他者」としての父親 — Freud の視点 —

Freud は『解剖学的な性の差別の心的帰結の二、三について』において、女兒のエディプス・コンプレックスを男児のそれと対比させつつ論じている。それによると、女兒も男児と同様最初は母親に対して愛着を向けているわけだが、女兒の場合のエディプス状況は父親への愛着と母親への敵意として表れるため、女兒はその愛着の対象を母親から父親へと向け換えなければならない。そのため女兒の場合、エディプス・コンプレックスの前史に目を向けざるを得ない。Freud は、女兒が最初の絶対的な愛着の対象である母親から目を反らし父親へと移行していく契機となるのは「去勢コンプレックス」であるとしている。つまり、女兒は異性の性器を観察すると「それが自分自身の小さな、陰にかくされた器官とは反対に優秀なものであることをすぐさま認識して、そのときからペニス羨望に陥」るのである。男性にはペニスがあるが自分にはないという認識は、女兒のナルシズムに強い打撃を与える。この打撃が女兒に及ぼす影響は様々である。例えば、「いつかはペニスを手に入れて、それによって男子と同じようになろう」という希望を持ったり、「自分が去勢されているという事実を認めることを拒否して、自分はあくまでもペニスをもっているのだとかたく確信し、後にはあたかも男性であるかのように振る舞わざるをえないようにさせられ」る場合もある。あるいはペニスを持たない女性は劣等な存在であるという価値観を持ち、その上で自分は「男性と同列であるということに固執」する。また、自分にペニスを与えてくれなかった母親に対して不満を抱き、その結果母親との情緒的結びつきが緩むことになる。さらに、ペニスと比較して明らかに劣等な性器——陰核——による手淫への抵抗が起こるとされている。このように見てくると、ペニスがないという認識に至った幼い女兒が、驚きや失望、抵抗、嫉妬、諦めといった実に様々な感情にとられる様子が伺われる。(この点に関しては、次に取り上げる『女性の性愛について』において、(a)性生活全般の中止の方向、(b)反抗的に男らしさを強調する方向、(c)究極的な女らしさへの萌し、という三つの方向にまとめられている。)この「去勢コンプレックス」によって、女兒のエディプス・コンプレックスが準備される。つまり、ペニス=子供という象徴的等価性に基づいて、ペニスへの願望から子供への願望へ移行し、父親に愛着を向け換えることになるというわけである。ここで、男児との根本的な違いが明らかになる。それはエディプス・コンプレックスと去勢コンプレックスとの関係であって、「男児のエディプス・コンプレックスは去勢コンプレックスにゆき当たって滅びてゆくのだが、女性のそれは去勢コンプレックスによって可能とされ、また惹起される」のである。つまり女兒の場合、エディプス・コンプレックスが「消滅」する動機はない。さらにここから、超自我形成における男児と女兒の相違も導き出される。既に見たように、男児の場合エディプス・コンプレックスの消滅は超自我の形成と相関関係にあり、欲望充足の禁止を内在化することにその中心がある。しかし女兒のエディプス・コンプレックスは男児のような経過を辿らないため、女兒の超自我は「われわれが男性に要求するほどにはけっして峻厳なものでも、非個性的なものでもなく」、より感情的であるとされている。

さらに Freud は『女性の性愛について』において女兒のエディプス・コンプレックスに関する考察を進めているが、そこでは女兒の前エディプス期、すなわち母親との関係の重要性が強調されており、父親の役割についてはほとんど触れられていない。

この論文によると、「母親との関係は非常に豊かで、多面的な」ものであり、後の父親への愛着の基礎を成すものであるが、同時に多くの女性はその根源的關係の中にはまり込んだままで、父親への転換を遂げることなく停滞してしまう可能性もある。そして、女性は結婚生活において夫との間に母親との関係を反復することさえ間々あるという。このように Freud は女性が母親から分離することの困難さを述べたあと、女兒が母親から離反する際の契機を幾つか挙げている。それは同胞や父親への嫉妬、幼児の愛の要求の完全性から本質的に導かれる幻滅、先に述べた去勢コンプレックス、陰核における手淫の禁止への反発等であり、もっとも強い動機となるのは自分にペニスを与えてくれなかったことからくる母親への恨みである。しかしこれらはどれも母親への敵意を正当化する根拠としては不十分であり、そもそも女兒の母親に対する愛着は本来的にアンビヴァレンツの傾向を持つとされている。このアンビヴァレンツ傾向があるからこそ、上記のような契機によって女兒は母親から分離し始めるのである。

この論文において Freud は、女兒のもうひとつの特徴として女兒の両性兼備性を挙げている。それは、女兒が男性とは違って性領域を二つもっている——陰核と膣——ということに由来する。これを能動性と受動性という心理的態度に置き換えてみたとき、女兒は男児と同様母親に対して能動性と受動性の両者を織り混ぜた志向性を示す。そして男根期においては、女兒も母親に対して強い能動的な願望を抱くとされている。しかしこのような能動的な性愛活動も、上記のような母親からの分離に伴って低下し、受動的な性愛活動へと移行するのである。

以上見てきたような Freud の見解に対して、これまで多くの批判がなされてきた。その殆どは Freud の「男性中心主義」に向けられたものである。確かに、ここではペニスの優位性——それはすなわち男性的な諸特徴の優位性に等しい——が大前提となっており、女性が男性に比べて劣った存在であるという認識を受け入れないかぎり、女性が異性愛に開かれてゆくことはあり得ない。ペニスがないということは欠陥であって、女性にとっての異性愛は男性（父親）からペニスを与えてもらいたいと願うことに等しい。さらに女性は男性に比べて超自我形成が不十分で道徳的にも劣った存在であると言うのであるから、多くの人々、殊にフェミニストたちの反発を招いたのも頷ける。しかし、村本（1987）は「Freud の女性観は、…単なる男性イデオロギーの表現ではなく、むしろ女性が一定の社会秩序の中で、どのように平均的な女性になっていくかを的確に描いたものとして評価されるべきだ」と述べており、筆者も同感である。現代的視点に立って批判することよりも Freud の目に映った女性観を辿り直すことの方が、より生産的であろう。

先に挙げた Freud の二つの論文において何より特徴的なのは、それまでは男児と似たようなものだろうと考えていた女兒のエディプス・コンプレックスを改めて見直すことで、母—娘間の愛着関係に目を向けざるを得なくなった Freud の驚きと困惑である。とくに『女性の性愛について』においては、母—娘結合の強さに手を焼いているという印象すら受ける。実際 Freud は、「このような母親への愛着という領域でおこることはすべて、私には分析的にとらえることが困難であり、ひどく古色蒼然とした、幻影のようなものであり、まるで特別にきびしい抑圧をこうむりでもしたかのように、ふたたび生気をとりもどさせることがほとんどできないものであるように思われた」と述べている。より早い時期に書かれた『解剖学的な性の差別の心的帰結の二、三について』では、去勢コンプレックスによって女兒の愛着を父親に移し換えることが可能であるとしているものの、実際には去勢コンプレックスを乗り越えられずに停滞してしまう場合も多いと

述べている。さらにその後にかかれた『女性の性愛について』においては、去勢コンプレックスですら母親と女兒の間の根源的な愛着関係を解く要因として十分でなく、もともと母-娘関係に内在しているアンビヴァレンツ傾向がより重要視されることになる。したがって本論文のテーマである女兒にとっての父親の役割は意外に曖昧で、母-娘結合の強さの前には父親の威力も半減するようである。だがFreudは、女兒がいつまでも母親との原初的な関係に留りつづけることはヒステリーやパラノイアの発病と関連があると述べており、父親を排除する形での母-娘結合はやはり非生産的なのであろう。筆者は、確かに去勢コンプレックスは母-娘結合を完全に切り離すものではないにせよ、女兒の発達において非常に重要な位置を占めていると考える。それは、性差の認識は斎藤(1983)の言うように「万能幻想の解体、有限性を思い知ること、原初的な自己愛の傷つき」であって、「自他を相対化して区分し」ていく重要な契機となるからである。

以上Freudの見解にしたがって考察してきたが、Freud自身は男性であるから、女性の発達を体験的に理解することは困難であったかもしれない。そこで次に、女性精神分析家による著作を取り上げよう。

IV. 女兒を異性愛に「開く」父親 —— Bonaparte 『女性と性』より ——

Bonaparteはその著書『女性と性』において女性の性愛について非常に綿密に考察している。彼女の理論は常にFreudに忠実であり極端なFreud主義者とさえ呼ばれることもあるとのことだが、この著作においてもFreudの解剖学的、生物学的側面が忠実に受け継がれている。だがそこには自ら女性としての立場が揺るぎなく示されており、Freudの著作とはかなり異なった趣が感じられる。彼女はこの著作の冒頭で、女性にとって生殖機能と性愛機能は全く別のものであって、生殖機能ではうまく適応できていても性愛機能においては適応できない女性は案外多いと述べ、以下この著作全体を通して、女性が性愛機能において適応する（それはすなわち陰的な性愛が可能であることを示す）ための諸条件を探究していると言って良いだろう。

この著作のすべてをここに紹介することは出来ないが、まず最初にリビドーの発達段階に関する見解を取り上げよう。これはアブラハムの説を批判、修正したものである。(表1)

彼女によれば、健康なリビドー発達の概略は以下の通りである。第一口唇期においては、乳児は自分と母親との見さかひもなく、母親に吸い付けられている。第二口唇期では、乳幼児は生え始めた歯によって母親を噛んだり食べたりしたが。この時期には分離された対象としての母親イメージが出来はじめ、この対象との完全な合体が強く望まれ、その意味で食人的とも言える。第一肛門サディズム期においては、母親による身体の世話を通して排泄口やペニスが性愛器官として受動的に目覚めさせられる。ここで幼児は、母親がその心地良い器官に触れて愛撫してくれることを望む。この頃サディズム的能動性も目覚めるが、受動的に刺激を受け取ろうという傾向がそれにも増して発達するという。第二肛門サディズム期には、幼児は大便をこらえることを学ぶ。つまり肛門は括約筋によって閉じられ、肛門の粘膜にとってより刺激的な固い大便を用意しようとする。ここで目覚めた能動性は次に男根、すなわちペニスあるいは陰核という器官に向かう。このとき男児、女兒ともに母親という同一の対象がそれぞれの能動的男根によって欲望される。次に去勢コンプレックスが発生する。男児のそれは「家長の命令の名で介入してくるとくに

表1 リビドーの発達段階

リビドーの組織段階		対象愛の発達段階	対象にむかう姿勢	
			男子	女子
アンビバラ ンス以前 ア ン ピ バ ラ ン ス	1. 第一口唇期 (吸収)	自己性愛 (対象なし)	前エディプスの姿勢 母親に対する最初の 口唇の受動性と能動性	
	2. 第二口唇期 (食人的)	ナルシシズム (対象との完全な合体)		
	3. 第一肛門サディズム期 (もしくは排泄口サディズム期)	部分愛 (合体をともなう)	母親に対する最初の 排泄口的・男根的受動性	
	4. 第二肛門サディズム期 (もしくは排泄口サディズム期)	部分愛 (所有をともなう)		
	5. 第一男根期	対象愛 (男根の表明と排泄口の 部分的除外をともなう)	能動のエディプス・コンプレックス <small>男子の陽性の エディプス・コンプレックス</small>	女子の陰性の エディプス・コンプレックス
	6. 第二男根期	対象愛 (男根の除外と排泄口の 部分的再開をともなう)	父親に対する第二期の 排泄口的受動性 受動のエディプス・コンプレックス <small>男子の陰性の エディプス・コンプレックス</small>	女子の陽性の エディプス・コンプレックス
去 勢 コ ン プ レ ッ ク ス				
潜 在 期				
アンビバラ ンス以後	7. 最終性器愛期	対象愛 (成人)	女性に対する最終 的な性器愛的能動 性 (ペニスの)	男性に対する最終 的な性器愛的受動 性 (陰的)

精神的な」もので、女兒のそれは「認めないわけにはゆかない解剖学上の事実の名で介入してくる、とくに生物学的な」ものである。この去勢コンプレックスによって、男児も女兒も男根的自慰が抑圧に向かい、能動のエディプス・コンプレックスが終結する。去勢コンプレックスの後、初めて父親、あるいはそのペニスが受動的に欲望されることになる。この受動のエディプス・コンプレックスは、男児にとってはあくまでも一時的なもので潜在期を経て再び女性に対する能動性を獲得するが、女兒にとっての受動のエディプス・コンプレックスは永続的なものとされている。女兒はその後潜在期を通過して、自らの男根の永続的な全面的もしくは部分的除外と陰の強調を伴う、男性に対する受動性に至るのである。

Bonaparte においては、「人間の本来的両性性」がその考察のひとつの軸となっているが、ここにはその視点が特徴的に表れている。すなわち能動性と受動性は交互に発達し、「受動性の発達」にも積極的な意義が認められているのである。基本的には排泄口が受動的器官であり男根が能動的器官として位置付けられるが、あらゆる器官は「最初は受動的に、次に能動的に機能する」のであって、「受動的男根」という概念も可能となる。とくに「排泄口の段階は女性らしさの素地として存在し」、それは後に女性が男性に対して抱く本質的受動性が築かれるべき地層として重要な意義を持つというのである。

ここで問題となっている女兒のエディプス・コンプレックスに関しては、去勢コンプレックスがエディプス・コンプレックスを準備するものであり、それが解剖学上の差として表れるという点や、エディプス期以前の母親との結合において、女兒が能動的に(陰核的に)母親を欲望するという点は Freud の説をそのまま踏襲している。とくに去勢コンプレックスを乗り越えることが女兒の発達において非常に重要であり、大きな転回点になるとしている点も Freud と同じである。

たとえば彼女は、「男子が男性になるためにはいかなる代価を払っても、自身のペニスを断念してはならないし、女子が女性になるためにはこのペニスの断念を正常に受け入れなくてはならない（傍点原著）」と述べている。男根を心的に受け入れない男性は、心的に自分を去勢しており、そこから男性の不能が由来する。また女性の場合はペニス羨望によって男性から心的にペニスを取り上げようとし、そこから腔の受動的感性を抑圧してある種のヒステリー性冷感症が生ずるといのである。しかし Bonaparte は「男子が正常な異性愛者となるために放棄することを習うのは、主体たる自分の男根ではなくして、愛される対象の男根である」と述べており、ここに Freud にはなかった新たな地平が垣間見られるように思われる。

斎藤（1983）が性アイデンティティに関する論文において詳しく考察しているように、男児は男性同一性を形成していく中で母親との間の原初の同一化から脱して行かねばならず、その分離個体化の過程は、母なる世界に引き戻されそうになりながらもかなり無理をして父の世界に這い上がっていくといった様相を呈する。そのため男児は女兒に比べて「男性ラベリング」に敏感で、「男らしくない」とか「女みたい」といわれることを嫌う傾向があるという。つまり、母の世界から父の世界に這い上がろうと苦闘しているとき、決別せねばならない母の世界を連想させる女性的な諸特徴はマイナスの価値を与えられる。とすれば Freud（1925）が述べているように、発達途上にある男児が女性に対して軽蔑のまなざしを向け、優越感に浸るとしても納得がいく。だが、成人男女の異性愛においては、男性はその価値観の転換を迫られるのではないだろうか。異性愛の相互循環的性質に立ち戻って考えるなら、Freud に見られるような「男性中心主義」は越えられねばならない。Bonaparte が男性はペニスのない女性を愛せなければならないと述べるとき、男女両性間の違いを前提としつつも女性を単に劣った存在としてのみ見るのではない、新たな視点が内包されているように筆者には思えるのである。

この点に関しては後にもう一度取り上げることにして、再び Bonaparte の著作に戻ろう。彼女は次に女性の正常なリビドー発達を妨げる諸要因について考察しており、その最大の要因は過度に強い陽性のエディプス・コンプレックスではなく、むしろ「幼児期に陰核的に願望された母親への強すぎる固着」にあると述べている。またペニスの代理としての子供を得たいという母性的要求は腔的性格を準備する重要な要因であるにもかかわらず、この母性の受け入れが女兒にとってそれほどたやすいものではないという点も妨害要因となるのである。それは、まず幼児期に大人の性交を観察したとき、一方で女兒はその行為を欲求するものの、父親のペニスの大きさと自らの身体にある穴——それが肛門であろうと腔であろうと排泄口であろうと——との不釣り合いから生体への傷を恐れることや、出産の想像が小さな女兒にとっては致命的な危険として受け取られること、さらに母親の位置を奪おうという願望は当然母親への攻撃を含み、その攻撃への報復を恐れる気持ち等が女兒を母性の受容から遠ざけるというわけである。他にも原因ははっきり分からないが、陽性のエディプス・コンプレックスを示しながらも自らの男根の除外を認めず、潜在期の間も過度に男根的反動を示す場合があるし、幼児期に陰核の自慰によってオルガスムスを体験するとリビドーが陰核に固着しやすいことも挙げられている。オルガスムスを体験する以前に陰核による自慰を放棄して潜在期に入り、男性のペニスが腔的性愛を目覚めさせるまで受動的に「待ち続ける」という在り方が、女兒の理想的発達なのである。Bonaparte はこの著作のあちこちで、女性の発達において「待つこと」がいかに重要であるかを繰り返し述べている。それ

は卵子が精子の到来を待つという生物学的レベルから、「眠れる森の美女」に代表される女性的神話のレベルにまで互っている。どんな形であれ陰核への固着は、この「待つ」という姿勢に反するものであり陸的性愛にとって妨害的に働くが、逆に幼児期の男根的活動が少なすぎても性愛機能全体の活性化が抑えられてしまうという辺りに難しさがあるようである。

以上のように、女性が性愛機能において適応するためには生命の危険に対する防衛をも含んだ実に多くの障害を乗り越えねばならない。これらの障害を考慮するなら、Freud が扱いかねていた母-娘結合の強さも了解できるように思われる。しかし、一体何がこの困難な発達の過程を導くのであろうか。

この点について Bonaparte は、女兒の発達を促すために男性が果たす役割を考察している。中でも父親は、女兒の陸が「開かれること」において決定的な役割を果たすとされている。すなわち女兒は去勢コンプレックスによって母親から父親へと愛着を移し始め、そのとき心的にも身体的にも自ら父親の愛の対象となることを望む。つまり父親が自分を愛し、自分を求め、愛撫し、侵入し、受胎させてくれたらと夢想するのである。そして夢想するだけでなく、父親との身体的接触から性愛的快感を受け取る。だが、この欲望は現実には決して満足させられることはなく、徐々に失望してゆくことになる。その際女兒は、どんな道徳的禁止であろうと父親の疲労からくる遊びの中断であろうと、欲望の充足を妨げるものすべてを愛情の不足のせいにして自分は父親からそれほど愛されていないのだと考えるのである。この失望があまりにも強烈であると、女兒は二度と愛の幻想を抱くことが出来なくなり、陸的に「開かれる」こともなくなってしまおうという。父親は女兒の身体的性的欲求を満足させることは出来ないにせよ、その代償として父親としての深い愛情を注ぐことが求められており、その父親の優しさが女性の性欲をうまく発達させる土壌となるのである。女兒は「他人が、目標は禁じられているがそのかわりに優しさ、愛情を彼女に示すとき、自然や男性が女性に要求する性心理的姿勢に、この姿勢が含んでいる自己愛的な、さらには生命的な危機をおかしても、すすんで順応する気持ちになる」と述べられている。しかしここにひとつの危険がある。すなわち女兒が過度に父親に執着し、そのため他の男性に対しては陸を閉ざし、いつまでも父親への貞操を守り続ける場合である。また逆に父親の愛が少なすぎても女兒の心に反抗心が増し、男性コンプレックスが強化される。その結果陰核が再び男性らしさを活性化させ、陸は父親に対して一度開かれて拒絶された後に、失望や遺恨や憎悪を伴って再び閉じられる。そして失望の度合いがあまりにも激しいと、男性から方向を変えて最初の能動的エディプス・コンプレックスの対象である母親に退行してしまうこともあるという。このように、この時期父親の愛情が多すぎても少なすぎても良くないわけだが、Bonaparte は一般には少なすぎる危険性の方が高いとしている。

以上のように、Bonaparte においては女兒の発達における父親の役割がかなり明確に述べられている。つまり、去勢コンプレックスによって女兒がその愛着を母親から父親へと向け変え始めたときに、女兒は父親に対して近親相姦的欲望を抱く。そのとき父親は、その欲望を満足させることは出来ないけれども、父親としての愛情を注ぐことで女兒の欲望をある程度満足させてやる。それが女兒の失望の程度を緩和し、女兒が性愛機能において適応する上での障害を軽減するというわけである。この点に関しては、Leonard (1966) やユング派の分析家である Samuels (1985) の論文にも同様の見解が見られる。たとえば Samuels によれば、女兒は父親との間で深いエロス

的色調のある関係を体験する必要がある、それは父親という異質な存在との結びつきが女兒の人格を刺激して拡大し深化させることになるからである。「娘と相互に引き合うこと、エロスのな充足の苦しい断念を相互になすこと、これらに父親が失敗すると、娘の心的な向上は失われる」のである。このような父親とのエロスの関係において、女兒はまた「母親のイメージに代わる女性性のイメージ」を獲得し、母性への拘束から解放されるとも述べられている。父親が娘のセクシュアリティをあざ笑ったり、厳しすぎたり、無関心であったりしてエロスが欠如する場合はもちろんのこと、実際に近親相姦が行われてしまったり、あるいはそうでなくても余りに過剰な近親相姦的な結びつきも問題を含むとしており、この点についても Bonaparte と同様である。したがって、父親は女兒を異性愛へと導く上で非常に重要な役割を果たすのであって、その役割は女兒に適度な愛情を注ぎつつ女兒の失望を促すことであると言えよう。女兒は父親との愛の幻想を心に抱き続けることによって、苦痛を伴う発達の道を喜んで進んで行くことが出来るのである。

しかし Bonaparte においては、このような父親の「愛情」だけでなく「攻撃」的な側面も重視されていると思われる。

Bonaparte によれば、女性の性愛は本質的にマゾヒズム的である。マゾヒズムは食人的口唇段階では父親に食われたという欲求に、肛門サディズム期では父親によって打たれ、懲罰されたいという欲求、男根期では去勢されたいという欲求、成人期では父親の代理人である男性によって侵入され受胎したいという欲求に表れるが、女性はこういった欲求を受け入れることが必要なのである。既に見たように、女兒も男児と同様に、男根的（陰核的）に母親を欲望する時期を通過し、その後去勢コンプレックスによって父親の大きなペニスの前に陰核の降伏が行われ、それによって以前母親との間に培われた受動的マゾヒズム的本能が再び活性化し、父親やその大きなペニスからサディズム的攻撃を受けたいと望むようになる。このマゾヒズム的幻想を担うのは陰核であって、その後女兒は父親の大きなペニスに対して排泄口的に道を開け、腔的性愛が準備されるというのである。ここで述べられているのは、言わば女兒の男根と父親の男根の衝突である。男根を肉体的、精神的意味での男性的諸特徴として象徴的に理解すれば、幼い女兒はその男性的側面において父親とは比較にならない。父親の圧倒的な優位の前に全面降伏をすることによって能動性から受動性へ、サディズムからマゾヒズムへの転換が起こるのである。したがって、父親の男性的で攻撃的な介入も女兒の発達にとって必要と見なされていると思われる。そして Bonaparte は、この受動性への転換を女兒が発達していく過程において必要かつ自然なこととして描いている。確かに、受動的でありマゾヒズム的であることがそのまま、女性の弱さや劣等性を示すわけではない。既に見たような障害を乗り越えて、女性が主体的にこのような発達の道を進もうとするなら、そこにはむしろ毅然とした強さが感じられる。そのとき女性は父親への愛によって支えられるのであろう。

以上のような Bonaparte の見解を Freud の見解と比較すると、新たな視点がいくつか見いだされる。まず第一は、父親の「愛情」が強調されている点である。既に見たように、男児にとっての父親は、妨害者であり競争者でありまた去勢の威嚇をする者としてまず登場した。しかし女兒にとっての父親は、「攻撃」よりも「愛情」によってその重要な役割を果たす。父親の「愛情」を通して、女兒は「新しい異質の世界を知らせ移し込（斎藤 1983）」まれるのである。また、父親の対応いかんによっては女兒が強い失望を味わって退行を起こすこともあるとされており、

そこから父親の在り方が問われることになる。Leonard (1966) は、娘が罪の意識や不安なく女性役割を受け入れ、同年代の若い男性に愛情を向けていくためには、父親との間に脱性的な対象関係 (desexualized object-relationship) を持つことが必要であり、その際父親が娘のファンタジーに魅きつけられたり、逆に娘を counter-oedipal に誘惑することなく娘に愛情を注ぐことが出来るかどうか問題となると述べており、Bonaparte の視点と重なるものがある。Leonard の言うように、父親が娘に対して適切に関わる事が出来るかどうかは父親が自らののエディプス・コンプレックスを解決している程度にかかっているとすれば、父と娘の関係はお互いを鏡のように映し合う相互循環的關係である。Bonaparte においてはこのような視点が萌芽として存在しており、これは Freud にはなかったものであろう。そしてもうひとつ重要な点は、近親相姦的欲望の充足を禁止する際の父親の態度である。つまり Bonaparte においては、父親は「かれ自身が娘の現実の性欲の案内者となれないことを、容赦してもらうための弁解」として、娘に愛情を注ぐべきだとされている。このような父親の態度は男児の場合とは全く異なる。男児の場合、父親は最初禁止する者、すなわち掟の体現者として現れるのに対して、女兒の場合はその父親自身が掟に拘束された存在として現れるのである。そしてそうすることで女兒のエディプスの願望を打ち砕いてしまわないことが、必要とされているのである。この点に関して Freud は、女兒のエディプス・コンプレックスが消滅する動機がないことから、女兒の超自我形成は不十分で道徳的に劣等であると述べていた。Bonaparte も、「母親に向かう攻撃は女子の受動的なエディプス・コンプレックスに対して、…超自我を与えることは出来ない」としている。だが果たしてそうだろうか。この問題はそれ自体ひとつの大きなテーマであり、本稿には収まり切らないが、今後の展望として最後に少し触れておきたい。

V. 女兒の超自我形成

Horney (1923) は、女性の去勢コンプレックスについて考察するなかで、去勢コンプレックスはそれまで考えられていたようにペニス羨望から直接説明され得るものではなく、もっと複雑な過程によって引き起こされた二次的なものであると述べている。彼女は去勢コンプレックスにとらわれている女性患者の分析から、次のように考察している。すなわち、女兒は発達早期に母親との同一視に基づいて父親から性的に占有されたという空想を形成する。この空想は現実によって否定されるが、後に去勢コンプレックスが支配的になるケースではこのときの失望が深い痕跡を残しており、そういった患者は、父親がかつては実際に自分の恋人であったのにその後自分を裏切ったと感じている。さらにその感情の深層に、原光景を目撃したことからくる母親に対する性的な嫉妬や、母親に取って代わりたい、母親を排除したいという強い衝動からくる罪悪感が存在する。その結果父親や子どもへの欲望を放棄して肛門期に退行するが、ここでペニスが欲しいという古い欲望が子どもが欲しいという欲望によって強化されて蘇り、愛情の対象としての父親は放棄され退行的に父親との同一視に取って代わられる。父親との同一視はペニスが欲しいという古い欲望とも一致するし、また父親との近親相姦的空想に基づく罪悪感から解放されるため、ますます強化されるというわけである。Horney は、こうした状態こそ「去勢コンプレックス」と呼ぶべきであって、純粹に解剖学的な差異に基づいたペニス羨望は「一次的ペニス羨望 (1926)」

として区別するべきだと述べている。

以上の考察から、Bonaparte が主張したような、女兒の近親相姦的の欲望をうまく断念させる父親の役割の重要性を再確認することも出来るが、ここでは女兒の「罪悪感」に注目したい。Horney によれば、去勢コンプレックスは父親との近親相姦の空想やそれにまつわる罪悪感、さらに父親から受けた深い失望と父親への怒り、父親との愛情関係によって去勢されたという空想等が複雑に絡み合っている。中でも母親への嫉妬と罪悪感はかなり深く抑圧され、なかなか明るみに出てこないと述べられている。ここで取り上げられたケースは、どれも Bonaparte のいう意味での「父親としての愛情」が不足した場合と考えられ、それだけ女兒の欲求不満は深刻になるだろうし、自分には与えられなかった父親の愛情あるいはベニス-子供を受け取った母親への嫉妬や攻撃は強化され、それだけ強い罪悪感に晒されることになるのであろう。だがここに去勢空想が絡むと、女兒の場合はベニスを持たないために「既去勢されてしまった者」、つまり罪人としての烙印を押された者となり得る点が男児とは異なるのではないだろうか。このように考えれば、女兒が罪悪感を処理できずに退行し父親に同一視することで女性としての自己を疎外させていくとしても無理はない。やはり、女兒にとって「処罰する父親」を内在化することと、女性として成長していくこととは両立し難いのであろうか。

斎藤（1982）は、超自我には二つの系譜があり、それは「悪しき」母親イメージをその先駆とする父系のもので、母親との間の快適な一体感に基づく母系のものであると述べている。そして前者は既に見てきたような制裁的で攻撃的な性質を持ち、エディプス・コンプレックスを通過する際に「攻撃者への同一視」を起こすことで内在化するが、後者は自我理想に代表されるような自己愛的でリビドー的なものとされている。そして「女性にとっては、権力的征服や攻撃は、それ自体すでに『悪』として感じられるところがあり、攻撃者への同一化を基本にした父系の道徳律にはなじみにくい」（斎藤 1983）ため、母系の超自我により重点がかかることも述べている。また Klein（1928）は、早期エディプス・コンプレックスについて論じる中で、女性の超自我の特殊性について触れている。彼女は「女性は、自らの願望を無視し倫理的で社会的な仕事に自己犠牲も顧みずに心を傾ける、という必ずしも過補償に基づかない偉大な能力を特別に持っている」と述べ、さらにこの能力は本来母性的性質のものであるとしている。肛門愛的サディズムの水準が非常に優勢な発達早期において、女兒は母親に対して激しい嫉妬や憎しみを抱き、そこから苛酷な超自我が形成される。この母親との同一化から引き出される超自我こそが、女性に特有の自己犠牲的態度を生み出す源になるというのである。

このように見てくると女兒の超自我形成は、Freud によって提出された父系の超自我だけでなく母系のものをも考慮することによって明らかになるように思われる。その際、母親との関係を見直すことが必要であり、母-娘関係に重点を移してもう一度女兒の発達過程を辿ってみると、女兒にとって望ましい父親の在り方がまた別の角度から見えてくるのではないだろうか。

<引用文献>

- Bonaparte, M. 1967 *La sexualité de la femme*. (佐々木孝次訳 1970 「女性と性」 弘文堂)
Freud, S. 1925 *Einige psychische Folgen des anatomischen Geschlechtsunterschieds*. (懸田克躬 他訳 1969 「解剖学的な性の差別の心的帰結の二、三について」 フロイト著作集 5 人文書院)

- pp.161-170)
- Freud, S. 1931 Über die weibliche Sexualität. (懸田克躬 他訳 1969 「女性の性愛について」 フロイト著作集 5 人文書院 pp.139-156)
- Horney, K. 1923 Zur Genese des weiblichen Kastrationskomplexes. (On the Genesis of the Castration Complex in Women. "Feminine Psychology" Edited by Kelman, H. (1967) pp.37-53)
- Horney, K. 1926 Flucht aus der Weiblichkeit. 女らしさからの逃避 (安田一郎 他訳 1982 ホーナイ全集 1 女性の心理 誠信書房 pp.26-48)
- Klein, M. (1928) Early Stages of the Oedipus Conflict. エディプス葛藤の早期段階 (小此木啓吾 他監修 1983 メラニークライン著作集 1 子どもの心的発達 誠信書房 pp.225-238)
- Laplanche, J. et Pontalis, J-B. 1967 Vocabulaire de la Psychoanalyse. (村上仁監訳 1977 精神分析用語辞典 みすず書房 p.322)
- Leonard, M.R. 1966 Fathers and Daughters. Int. J. Psycho-Anal, 47, 325-334.
- 村本詔司 1987 [解説] ユング心理学における女性理解 (ポリリー・ヤング・エイゼンドラス著 村本詔司, 織田元子訳 1987 「夫婦カウンセリング」 創元社 pp.319-360)
- 小此木啓吾 1985 現代精神分析の基礎理論 弘文堂
- 斎藤久美子 1982 人格発達とモラルティ ——「愛」と「怖れ」—— 下程勇吉編 教育人間学研究 法律文化社 pp.274-293
- 斎藤久美子 1983 性アイデンティティ 岩波講座 精神の科学 5 食・性・精神 岩波書店 pp.175-220
- Samuels, A. 1985 (原題不明) 概論 現代の父親像とユング心理学 (小川捷之監訳 1987 父親-ユング心理学の視点から 紀伊國屋書店 pp.13-73)

(博士後期課程)